巻　頭　言

■「伝説のスピーチ」から20年

手　塚　正　道*

やろうと思ってもなかなかできないことが多々ある。その思いとは裏腹に，そのうちどうにかなるだろと開き直るか，べつのことをしてお茶を濁している場合が多い。

筆者の最近では，マラソンへの挑戦と休肝日を設けることである。マラソンブームに便乗しやってみたいという気持ちはあるのだが，1分も走らないうちに息切れし足が上がらない状態になる。電車に間に合わないようなときは階段を必死に走るのではあるが。休肝日もまさに3日坊主以下である。いずれも意志が弱いだけのことである。

サステナビリティ（Sustainability）という用語がいろいろなところで目に留まるようになってきた。訳せば持続可能性ということになるが，奥は深いようである。インターネットで調べたところ，1987年に開催された「環境と開発に関する世界委員会」の報告書（ブルントラント報告）の中で「サステナブル・デベロップメント（持続可能な発展）とは，次世代の人々のニーズを満たすための能力を損なうことなく，現在世代のニーズを満たすこと」という定義が用いられ，環境に関する用語として広く普及したとのことである。さらに，サステナビリティを実現していくためには，環境性はもちろんのこと，経済性，社会性を含めて，それらのバランスを総合的に考える必要があることが認識されてきている。ここで，社会性とはどのような指標で評価するのであろうか。

国連のある統計によれば，1990年から2010年まで20年間の地球環境の変化を見ると，総人口は53億人から69億人（1.3倍），国内総生産（GDP）は22兆ドルから63兆ドル（2.9倍），二酸化炭素排出量は年間210億トンから290億トン（1.4倍），エネルギー消費量（石油換算）は80億トンから112億トン（1.4倍）と増加しているとのことである。この集計によれば，人口の増加割合と，エネルギー消費量および二酸化炭素排出量の増加割合がほぼ等しくなっている。総人口69億人のうちの13億人は電気のない生活している人々であること，今後総人口が90億人にまで達するという予測，さらに自然界の二酸化炭素吸収量として現状年間110億トン程度であるものが，今後も進むであろう自然破壊により減少することを重ね合わせると，すべての人たちが平等に，現在私たちが享受しているレベルのライフスタイル（エネルギー消費）をしたとするとどうなるのであろうか。

1992年の地球サミット（リオデジャネイロ）で，セヴァン＝スズキという12歳の少女の「伝説のスピーチ」があったことをインターネットで知った。12歳から13歳の子供たちが，自分たちで費用を貯めて，カナダからブラジルまで1万キロの旅をして会議に出席し，大人たちに訴えたかったことは，筆者の掻い摘んだ解釈によれば，

- 大変なことが急速に進んでいるという認識がない
- 回復できないものを破壊し続けるのはやめるべきだ
- 無駄遣いしているのに，分かち合う精神はないのか
- 未来に生きる子供たちのことを考えたことがあるのか

というものである。

前出の統計を見るかぎり，彼女のスピーチは活かされていないようである。現状の枠から抜け出せず，どうにかなるだろうという認識があるということであろう。

本学会において，プレストレストコンクリートサステナビリティ委員会が3月から活動を開始した。まだどのような成果を目指すのか等これからであり，委員会自体の持続可能性が問われそうであるが，結論を急がず議論を深めたいと考えている。サステナビリティという奥の深いところからプレストレストコンクリートを概観し，その延長としてプレストレストコンクリートの持続可能性を検討することができないものかと考えている。一人では意志が弱く何もできないが，このような活動を通じてセヴァン＝スズキさんのスピーチに何かしら応えられればと思う次第である。

* *Masamichi TEZUKA*：オリエンタル白石㈱ 技師長